

動物福祉と供養の倫理

伊勢田 哲治

京都大学文学研究科現代文化学専攻現代文化学講座

日本における動物の福祉への配慮の取り組みは常に欧米からの外圧に答える形で、いわば受動的に進んできたように見える。そもそも日本における動物愛護運動の発端も一種の外圧によるものだった。動物実験に対する規制も同様のパターンをとってきた。

このように後追いにまわらざるをえなくなる一つの理由は、日本の文化において動物福祉のとりくみの背後にある思想が非常に異質だからではないだろうか。発表者の分析では、欧米における動物福祉を理解するためには動物の権利論との対抗関係を視野に入れる必要があり、そして動物の権利論は「種差別」の概念を通して過去の人権運動から訴求力を得ている。倫理学においても、動物の権利論への反論は非常に難しいことが判明し、動物への配慮が何らかの形で必要であると広く認められている。

発表者は、日本文化の文脈でも「腑に落ちる」動物福祉の理論を構築することで、単なる欧米の後追いでない動物福祉の取り組みを日本から発信していくことができるのではないかと考えている。その手がかりとして注目しているのが「動物供養」や「動物慰霊」という営みである。日本では学術機関も含めて広く行われている動物供養であるが、諸外国ではあまり行われていない。日本において人間と動物の関係が供養を軸としていることをきちんと考察していくならば、日本からの人間と動物の関係についての発信は可能かもしれない。

ただし、日本的な動物倫理を構築しても、それが欧米の観点から受け入れ不可能であったり、まじめにうけとってもらえないような水準のものであったりしたなら、そうした役割は果たせない。今回の発表では、動物供養の基礎にある考え方を「犠牲にするものとされるもの間の関係から発生する責任」ととらえ、これを一種の関係的倫理として倫理学の中に位置づける。

今回の発表では、こうした問題設定の背後にある倫理学の考え方についても説明を補足しながら、供養の倫理の可能性について一緒に考えていきたい。